立教大学英語教育研究所研究成果報告書第 4 号（2012 年 3 月発刊）掲載

東北にまつわるイメージの形成および青森の人々の自己認知について

青森公立大学　山本志都

東北 6 県（青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島）は地理的に広大で多様性に富む。総面積は 63,983 平方キロメートルであり、これに相当するのは「三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山・鳥取・島根・岡山・広島・山口」の総面積である。三重から山口までを総称で呼んだり一体化して見たりはしないにも関わらず、「東北」を一体化して見ることは多い。青森に在住していると言うと「仙台の〇〇先生とお会いになるとよいですよ」といった声がけをいただくことがある。同じ東北だから紹介したいという親切心に感謝しつつも、青森から仙台は高速道路で約 350km の距離にあり、これは東京から仙台までの距離にほぼ等しく、近隣と呼ぶには遠い。東京を起点に西へ行くならば、この距離は名古屋を越えたあたりに相当する。

「東北」というイメージの形成はどのような変遷をたどってきたのであろうか。河西（2001）によると、「東北」の呼称は幕末以降に使われるようになったのであり、明治前期にはまだ東北地方を同質で一体化した地域として見る視点はなく、個々の地域の独自性を見聞記として伝える語り口が多かったという。当時においては「蝦夷地」や「未開」というイメージと同時に、未開ゆえにこれからの開発可能性を持つ「豊かな大地」という見方があった。ところが、明治末期の 1900 年前後に、東北が社会的関心を集め新聞報道されるような出来事が相次いで起こり、その頃から「後進地」、「貧しくて遅れた東北」のイメージが形成され、さらに「東北」という一体化したイメージが定着するようになったという（河西, 2001）。その出来事とは「津波」と「大凶作」であった。1896 年の三陸大津波では死者 2 万 6 千人を超え、多くの人々が被害を受けた。新聞は救援者らの言葉を伝える記事を掲載し、方言の壁や通訳をつけなければならないほど言葉が通じないことを報じた。また、1902 年と 1905 年の東北大凶作では青森、岩手、宮城、福島での悲惨な凶作と飢饉の様子が伝えられた。それら社会的関心事に関わる報道により、「解しがたく閉口すべき方言」との位置づけが中央に向かって発信され、また劣悪で貧しい地というイメージが形成されたのではと河西（2001）は考えている。

では、現在の東北のイメージはどうであろうか。「田舎」、「素朴」、「方言」、「雪」、「出稼ぎ」等のキーワードが出てくることが多いようである。東北の代名詞のように使用される「みちのく」は福島、宮城、岩手、青森の 4 県を指す「みち（陸）のおく（奥）」の音変化によるものとされるが、そこには「辺境の地」、「見知らぬ地」というイメージが付随する。

1992 年に山形新幹線が開通した際の JR 東日本のキャッチコピーは「その先の日本へ」であった。青々とした田や田舎道や川と素朴な人々の姿が映し出され「その先の日本へ、JR 東日本がお連れします」というナレーションが入る。大変好評な CM であったが、河西（2001）は「微妙な表現だったのでは」という疑問を投げかけている。「その先」という言葉の解釈を考えてみると、時間軸では「未来」、水平軸では「地理的範囲」を示すとすることができる。地理的範囲とした場合、「その先」とは「この日本」の人達に非日常感や憧れのイメージを与えると同時に、「その先」という境界線で東北を「この日本」と分け、未開・未踏の地として位置づける可能性を含む。河西の感じた違和感はこのようなものであったのではないかと思われる。

2010 年 12 月に、東北新幹線が新青森駅までの全線開通を果たした。JR 東日本のキャッチコピーは「MY FIRST AOMORI はじめての青森」であった。若手人気俳優を起用し青森の食や文化を初体験する初々しさをアピールする CM には好感が持てた。しかし、「はじめて」とはこれまで「未知」、「未踏」であったことを示唆し、山形新幹線から 18 年が経っても中央との関係性に大きな変化のないことを感じさせる。

東北 6 県の県民性としては、祖父江（1971）は地味で口数が少ないといった「内向性」や「粘り強さ」や「勤勉性」を挙げている。青森の県民性について、筆者は文献によく挙げられる「じょっぱり（強情っ張り）」、「人情深い」、「保守的」、「無口」、「せっかち」の 5 つの特性を選んで尺度化し、青森県内者と県外者を対象にしたアンケート調査を行った。結果として、県外・県内共通で「人情深い」と「保守的」イメージが最も認知されていた。「じょっぱり」と「せっかち」イメージは県外者には認知されておらず、青森県内において特に津軽出身者が自分たちのイメージとして認知していることがわかった。県外者と津軽の人との間での異文化コミュニケーションに示唆を与えるものである。また、県内者の年齢高群と低群では方言や津軽と南部の確執等についての認知に統計的に有意な差が認められたものの、5 つの県民性イメージの認知に差は認められなかった。

最後に、中央と周縁との関係について述べることでまとめに代えたい。山下・作道・杉山（2008）によると、収斂的な近代化論では、中央からの変化が周縁へと波及し、最終的には均質化する。そしてそこには中央から周縁への序列的関係や価値的優劣が含まれる。しかしながら、津軽地方では人口の少なさによる集合実践の生じやすさ（「皆がそうするはずだ」の感覚）という環境があり、「こちらではこうする」といった独自の実践を通じた共同性が発揮される。中央からの制度は、本州の北端という「最周縁」の地ゆえに、徐々にではなく「洗練された形」になった後で一気に入ってくるが、このプロセスは受け身で進行するわけでなく、受け入れや抵抗やズラしや日常化が起こっているという。青森には、中央に対する後進感や劣等感があったとしても、同時に「じょっぱり」の精神や、人やモノの流動性が低い「最周縁」性がもたらす独自性もあるのであろう。また、年齢の高い世代と低い世代では意識に変化がみられる一方で、県民性イメージについての認知は共通していることから、均質化する部分と変わりにくい部分があるともいえる。

日本を国単位で見ると、国内において中心的立地の機能を持つ東京と最周縁の地としての青森という関係性が成立する。しかし、中心的立地の機能をもつ地方都市が中央文化として機能し、その周辺地域との間に「中央―周縁」の関係性を成立させているという点にも留意したい。青森県内で見ると、青森市と下北半島にあるまぐろで有名な大間町との間でも同様の関係性が成立するといえる。世界単位で見ると、あるいは日本が最周縁となる文脈もあろう。中央と周縁の関係性は入れ子構造であり、周縁の地はどこにでもある。イメージの形成には中央―周縁関係とマスメディア等を通じた情報との兼ね合いがかかわるようであった（e.g. 津波時の報道）。中央―周縁関係のもたらす影響を考慮することで、異文化コミュニケーションに役立つ視点が得られると考える。

参考文献

河西英通（2001）．　東北――つくられた異境――　中央公論新社
祖父江孝男（1971）．　県民性――文化人類学的考察――　中央公論社
山下祐介・作道信介・杉山祐子（編著）（2008）．　津軽、近代化のダイナミズム　御茶の水書房